

御神渡り

諏訪湖(水面標高 759m)の冬の風物詩「御神渡り」が 2018 年 2 月以来出現していない。^{やつるぎ}八剱神社は 2026 年 2 月 14 日、明けの海につき「御渡無御座候」と注進状に記入して諏訪大社に奉獻。先人が残した最古の観察記録は室町時代の 1443 年。この現象は、地元では諏訪大社の上社の男神が下社の女神のもとへ通った際の「神の通り道」とであると伝えられている。

武田軍が氷上渡り(湖面渡り)をしたという伝説が残っている様である。武田氏が滅亡した天正 10 年(1582)の冬に諏訪湖が一度も凍らなかったという記録が残されているとのことだが、「御神渡り」が現れない明けの海は昔にもあった様である。

昔の諏訪は寒かった。山道は凍り、木でつくったソリで滑った。スケート靴はなく下駄スケートが流行っていた。下駄スケートは明治時代に下諏訪の^{かざり}銚職人が外国製のスケート靴をモデルにして発明した。濡れたタオルを廊下に干しておくと翌朝は、かちかちに凍っていた。「ちゃんちゃんこ」や「ねこ」を着て炭火の暖かいコタツに入るのが楽しみの一つであった。人々は、「今朝は凍みたなあ」という挨拶をしたものである。

氷の世界、地球温暖化等の影響でしばらくみられなくなってしまった。

当たり前だった「御神渡り」がみられなくなったのは、本当に寂しい限りである。

(川端紅葉著 2026・2・14)



「昭和中期 神宮寺から見た諏訪の冬景色」 ©川端紅葉
真正面奥の山は蓼科山(標高 2,531m)

丑のくだち
午前二時を中心とした二時間が丑の刻。
故に丑のくだちは三時前後。

柿澤
東京豊島区荒川町の一画。

陸月十五日、諏訪の御社の筒粥の御神事に詣でんとて、丑のくだちに起きて出行く。かくて鹽尻に來けり。大なる木の高きを往來の中におし立てたり。そが末には色々の紙もて幣切掛けて、白紅の八丈紙に、小袋添へて附けたり。其なかばよりは、しりくべ繩を蜘蛛のゐの如く引きたり。こは御柱とて、十三日の朝、初の聲がねにこの土掘らせて、居杭刺させなどする例といへり。町々處々に立てたるは、月の光にをかしく見えたり。こゝを柿澤と謂ふ。

咲く梅の色をも香をも降り埋む雪に隔つる
かき澤の里

とて春は來ぬ
遙かに春が來たの「とて」は氷の「解く」とを言ひかけた巧みである。

けふなん春の立ちければ、長居坂にかゝりてつらゝ路分きて、
とけ初むる岩間のつらゝ長居坂越來る春の跡をこそ見れ
犬飼の清水に臨みて、
惜みにし年は昨日にいぬかひの清水の氷とく春は來ぬ
月の影かと思れば、誰袖も眞白に霜置き渡りて、足手しみわたりぬ。
うちつどひ重なる袖に降る霜を拂へど月の影にさえ行く
峠に登り得て遠方を望めば、月は雪の外山に落つるに、

聲困じ負けたる里に
小正月の夜、行幸に、都どうし競争の
あつたのは、その時、年古に用ゐら
れたからであつた。早起の競争に他念も無
いのであつた。

鳥の二聲三聲、信れて過ぎける方は、紫だちたる空の
おかしきに、不二は他山にまよふかた無く獨り登へて、
銀布きたらんやうなる湖の氷を、切分ちて出でぬと覺
ふ。やがて其郷に到るに、未だ明けはてぬ空に、小供ら
あまた聲して、火串を燃やし折敷打敲き、今日は誰が鳥
追、太郎殿の鳥追か、二郎殿の鳥追か、おらもちと追つて
やる、ほんがらほと山谷どよみて、田面や畔を歌ひめぐ
るは、聲困じ負けたる里に、幸無き例にこそ、富士はい
よ、俯けしきさだかに見えたり。春宮にぬき奉ると
て、

仰げた、今朝は霞のたつか弓春てふ宮に春
の恵を

かなへすへて
病の差を指ふるこゝである。共に見た人
は、病に見せる文章で無かつたり新しな
う、病に難語を使はうとはしなかつたり

なりはひ
白井氏は常に農作物といふことを「なり
はひ」と言つて居る。語原論に由れば正
世までの、農産の豊凶のことであつた。

御社のこなたかなたに椿焚きて人集まりて、藁鞋の水
袂の霜解かしてあたりぬ。御社のかたへには柱四つ
立てたる中に、かなへすへて今日の筒粥煮るめる。御
神樂の聲を聴きつゝ待居たるに、やがて小さやかなる
戸押開きぬれば、我先にとくゞり入るに、脇差の鐔に頭
打たれ袖などをかしこの釘に引掛けて、これを撫でつ
ゝ後見返りて、急ぎて御社の下にかゝまり集ひて、我も
我もと押合ひ居寄りて、矢立に息しかけて、今や今よと
待ちぬれば、祝赤黒白の袂ゆたかに段階に昇りて、柏手
はたゝと聞えて後、やゝありて白き袂の祝筒を破り
てなりはひの善惡を喚ばふ。人々手毎に束短かの筆
にて、懷紙に書い付く。こは米麥好かりつるよ、今年は

その五くさの
此次の字不明、脱字かと思はれるが、「う
へや」であつたか否か確かでない。

尾花が袖の裾を
此神は雲屋の秋祭に願しまつる故に、新
ういふと神意を知ぐことなるのであ

世中よかるべし。此占の尊さよ。御粥は子の始より、
御階に日當るまでに煮やし奉ることは、年毎の例なり
けるなど、聲高に語るに、神事果てぬれば皆歸りぬ。
けさ春の霞の衣、うら問ひてその五くさのう
や知るらん

雪路分きて秋の御社に詣て、詠みし歌に、

下もゆる尾花が袖の裾を雪にぞ見つる秋の
御やしろ

海べたに臨みて御渡の跡を見れば三尺四尺水立ち破
れて、西東に青み流れたり。此水の上をかち木はきて
人々渡れり。

諏訪の海神の渡りし跡とめて危うげも無く

すはの海の

白井氏の他の日記の序文に、「洲羽の海」
といふ一巻があるといふのは、即ちこの
「半のまゝ」に見えたる文章のことであら
う。標題は多分此と次の一首の歌に由つ
たもので、初めは諏訪の御事だけに限る
つもりでは無かつたことと思ふ。

見るめもなみの
湖水は海松の無い海だから、古くから此
句がよく用ゐられて居る。それを見る、
久しい習ひであつた。

通ふもろ人

此歸るさも富士の根はほの霞みて、雲の白く流れたる
けしきの、氷の上に映りたるを、高嶺より見たる、世に類
無し。

たぐひなきながめをこゝにすはの海の氷の
上に映る富士の根

また

をしがものみなれそなれし跡絶えて見るめ
もなみの氷る海づら

今日もひねもす雪路分きて還りぬ。あくる夜、夢のう
ちに、此春宮の前より富士を見やりて、
諏訪の海霞める富士のうつるかな衣が崎に